



トピックス

日本蜘蛛学会第 29 回大会 (三重県四日市市) 開催される

1997年8月23日から24日にかけて、三重県四日市市の四日市市立博物館において全国各地から50名余りの参加者を迎え、日本蜘蛛学会第29回大会が開催された。講演数は17題と例年に比べてやや少なかった。また2日目の午後には「情報交換会」という企画も実施された。以下に、この大会の様相を紹介しよう。榭元敏也氏の「分子系統からみたイソウロウグモ属の進化」と千田高史氏の「日本産ゴミグモ属の分子系統」はDNAを用いたクモ類の系統解析研究が、わが国でもいよいよ活発になってきたことを感じさせた。方法論など一般の会員には難解な部分もあったが、DNAを利用した研究の有効性や問題点を具体的に提示してくれた。ク

モ類の研究においても、今後は単に系統解析にとどまらずに、行動生態学など他の分野への広範な研究に用いられることも期待したい。一貫してクモ類の光周性について研究している田中一裕氏の「オオヒメグモの生殖休眠におよぼす光周性と温度の影響」は、本種の生殖休眠が短日条件で誘導されるという既発表に基づき、さらに他の環境条件についての影響を調べたものである。ここでは温度条件を調べ、長日・短日

ともに休眠率は低温ほど高くなることがわかったという。宮下直氏の「ミナミノアカイソウロウグモの体サイズと占座場所の関係はなぜ変化するのか」は本種の体長と網内での占座位置の関係を調べたところ、大型個体は9月には網の中心に多く、11月には捕獲域に多かった。これは、9月と11月でホストが捕獲する餌のサイズが変化し、それに伴ってイソウロウグモの餌盗み方法が変化すると考えられたとのこと。前三者の研究はいずれもそれなりの施設設備がないとできないが、宮下氏のものは旅費の点を除けば、紙と鉛筆と物差しがあれば誰でも可能な仕



事のように思われる。しかし、研究計画法と統計処理は評者のような凡人の及ぶものではない。井原庸氏の「四国におけるヤミサラグモ属の地理的分布と多様化」は四国のヤミサラグモ属を生殖器の形態と地理的分布に基づき14種に区分し、近縁種と類縁の離れた種での分布パターン

を調べたもので、前者は異所的、後者は同所的であったという。いつもながらの綿密な調査と豊富なデータに基づくもので圧倒された。2日目の午後に設けられた、「情報交換会」という試みは以前に実施された記憶がある。正直に言ってあまり期待していなかった。しかし、池田博明・斎藤慎一郎両氏によるマミクロハエトリ(仮称)についての分類上の話題は、現代の分類学が抱えている問題点を端的に示しているように

思え、興味深かった。クモの分類学が分類学者の間だけで「わかる」会話をしていた時代に終止符がうたれつつあるように感じたのは評者だけだろうか。クモの飼育法に関する話題も大いに参考になった。宮下和喜氏によるクモの餌としてのトビムシの飼育法は、とても簡便であり今後利用者が増えそうである。このような催しはともすると散漫になる危険性があるが、今回はそれなりに充実していたように感じた。企画を準備された関係者に敬意を表したい。毎年とはいかないまでも、数年に一度くらいならこのような催しがあっても良いと思う。なお、次期大会は98年8月下旬に滋賀県草津市の立命館大学で開催される予定である。(新海 明)

学会同好会情報

日本には日本蜘蛛学会だけでなく、各地に同好会がある。ここでは、そこで行なわれる採集会や発表会、そこで発行される定期刊物などの活動内容を紹介する。興味を持たれた方はぜひ入会して、行事などに参加されてはいかがだろうか。

東京蜘蛛談話会(会長: 萱嶋 泉)

会報「KISHIDAIA」を年2回、「談話会通信」を年3回発行。採集会年4回・合宿年1回・総会例会などを年2回実施。

今年度の採集会(第4回)は、1998年2月22日(日)。場所は千葉県船橋市「船橋県民の森」。新京成三咲駅から県民の森行きバス乗車。午前11時集合。例会は、1997年12月7日、目黒区駒場住区センター、午前10時から。

KISHIDAIA 72号(1997.10.15発行)

大熊千代子博士追悼

新海 明: ツリサラグモとムネグロサラグモの精網と交接の観察

佐藤幸子: オオヤマイロカニグモの交接

佐藤幸子: ハタケグモの産卵

加藤むつみ: トゲグモの成長に伴う形態変化

新海 明: 「自然の観察」に掲載されたクモ類の文献抄録

新海 明: 「採集と飼育」に掲載されたクモ類の文献目録

畑守有紀・新海 明・上田俊穂: クモタケの全国分布調査結果

新海 明・平松毅久: ハグモの一種(通称「赤いハグモ」)の配偶行動

DRAGLINES

新海 明・梅林 力: クモの糸上のコウガイビルの観察2例

新海 明: ジグモの分散の観察

新海 明: 「植物及動物」に掲載されたクモ類の文献目録

新海 明・金野 晋: 九州地方のワスレナグモ



の記録

新海 明：網の中にいたコハナグモ

新海 明・宮下 直・千田高史：横浜市でアカ
イソウロウグモを発見

新海 明：富士山麓でのジョロウグモの記録

安田明雄：高知で謎の卵のうを発見

笹岡文雄：空蝉とクモ

安田明雄：金華山でトゲグモを発見

安田明雄：ソメワケトリノフンダマシの採集と
その卵のうの観察記録

福島彬人：秋田県の真正蜘蛛類研究史

福島彬人：秋田県の真正蜘蛛類目録

入会申し込み

3500816 川越市上戸 91 - 3 瀬尾荘 202

平松毅久（事務局）

TEL 0492 - 33 - 8792

会費 年 2800 円（学生 2000 円）

関西クモ研究会（会長：山野忠清）

会報「くものいと」を年 2~3 回発行。採集
会を年 3 回，研究会例会を年 1 回実施。

今年度の採集会（第 3 回）は，1998 年 3 月
21 日に予定。場所は未定。例会は，1997 年 12
月 14 日に大阪市の四天王寺高校で実施。

くものいと 22 号（1997 . 6 . 30 発行）

加村隆英：大和葛城山（奈良県御所市）のクモ

吉田 真：阿部茂さんを偲んで

西川喜朗：錦三郎先生を偲んで

吉田 真：草津よいとこ，一度はおいで

年間行事案内

榎元とも子：わが家のかわいいミズグモ家族

入会申し込み

5670008 茨木市西安威 2 - 1 - 15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

TEL 0726 - 43 - 5421

（内線 5113 西川研，5106 加村研）

FAX 0726 - 43 - 5427

会費 年 1000 円

中部蜘蛛懇談会（代表：村上 勝）

会報「蜘蛛」を年 1 回，「まどい」を年 3 回
発行。採集会・例会を年数回実施。

今年度の総会・研究会は，1998 年 2 月 11 日
（水）祝日に予定。

蜘蛛（KUMO）29 号（1997 . 2 . 11 発行）

吉田 真・榎元敏也：ゴミグモとズグロオニグ
モの網の枠系について

福島彬人：ヒメハナグモについて - 飼育記録か
ら -

益田和昌：名古屋の倍足類（ ）

益田和昌：三重県北部の倍足類

緒方清人：ワスレナグモの集団住居について

緒方清人：福島県猪苗代町東邦大学磐梯ロッジ
周辺のクモ

緒方清人・小笠原幸恵：名古屋市真正クモ類

ISSN #917-7906

蜘蛛

No. 29
February 1997



中部蜘蛛懇談会
CHUBU SPIDER STUDY GROUP

について(3)

永井 均：コーデニツツサラグモの生殖器異常
個体について

太田定浩：四日市のセアカゴケグモ

緒方清人：セアカゴケグモに咬まれる

新海 明：犬山城のキシノウエトタテグモとズ
グロオニグモの小道

小笠原幸恵：短期間で成体になったヒメフクロ
グモの一例

小笠原幸恵：スズミグモの越冬について

小笠原幸恵：京都知恩院境内のクモ

田辺陽一：キシノウエトタテグモの巣作りの撮
影記

写真のページ：四日市のセアカゴケグモ
短報

須賀瑛文：三重県のクロガケジグモ

緒方清人：マダラヒメグモの新産地

緒方清人：アシプトハエトリは集団越冬する。

益田和昌：岐阜県可児郡御嵩町のヤスデ
入会申し込み

4440903 岡崎市東大友町字松花 86 - 1 - 103 号

板倉泰弘(事務局)

TEL 0564 - 34 - 2753

会費 正会員年 2500 円(高校生以下,1000 円)
準会員「まどい」のみ送付,会報なし,年 500
円

三重クモ談話会(本部:太田定浩)

会報「しのびぐも」を年 1 回発行。採集会・
合宿・例会などを年数回実施。

冬の採集観察会兼総会は,1998 年 3 月 22
日(日)に阿山郡阿山町一帯で予定。

しのびぐも 24 号(1996.12.31 発行)

福島彬人:三たび クモ三題ばなし

新海 明:クロガケジグモは子育てをしない

川村彩乃:三重クモ談話会に入会して

予告

日本蜘蛛学会第 30 回大会は,
1998 年 8 月 22 日と 23 日に
滋賀県草津市の立命館大学で
開催されます。

どのような大会にするか検討中です。

ご希望がありましたら

大会事務局までご連絡下さい。

事務局

立命館大学理工学部生物地球科学研

吉田 真 0775 - 61 - 2660

三重クモ談話会:四日市のセアカゴケグモを追
う

三重クモ談話会採集会報告

入会申し込み

5150044 三重県松阪市久保町 1843 - 157

貝発憲治(事務局)

会費 年 1500 円

和歌山クモの会(会長:米田 宏)

会報「和歌山クモの会会報」を年 1 回発行。
総会・観察会を年 1 回開催。

来年度の採集観察会(第 8 回)は,1998 年 8
月 30 日(日)総会・研究会は,1998 年 8 月 30
日(日)に予定。

和歌山クモの会会報 No. 7(1997.6.10 発
行)

米田 宏:クモに関する迷信や伝説(3)

米田 宏:クモに関する迷信や伝説(4)

東條 清:和歌山にもセアカゴケグモ現れる

稲田武彦：俳人小林一茶の「蜘蛛」を詠んだ句について

和歌山クモの会事務局：和歌山クモの会総会と観察会（1996年度）

入会申し込み

6420002 海南市日方 1156 東條 清（事務局）

会費年 500 円

九州クモの会

ここ数年間、会誌の発行はありません。

関西クモゼミ

毎月1回、第2か第3土曜日が日曜日に滋賀県草津市の立命館大学で開催。会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 立命館大学理工学部生物地球科学研究

吉田 真 0775 - 61 - 2660

東京クモゼミ

毎月1回、第1日曜日に市川市の加藤輝代子氏の自宅で開催。会費などなく誰でも参加できる。東京クモゼミ報告（プリント）を配布。

連絡先 新海 明 0425 - 22 - 2605

（新海 明）



日本で最も大きな円網はオオジョロウグモだと信じられていることが多い。しかし、過去のデータを調べてみると平均でタテ 70 × ヨコ 57cm ほどで（新海，1985），それほど大きくはない。私が観察した本種の最大の網は，1997年9月12日に沖縄県名護市の名護城で記録したも

ので，タテ 140 × ヨコ 90cm だった。私が，今までに観察した最大の円網は東京都八王子市の八王子城跡で 1993年7月31日に記録したもので，タテ 210 × ヨコ 120cm。網主はタニマノドヨウグモであった（新海，1994）。これと同様な大きな円網を見つけた方がいたら，是非ともこの欄で紹介願いたい。（新海 明）



日本各地で採集された 稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。

ツシマトリノフンダマシ

沖縄県国頭郡国頭村琉球大学与那演習林 1997年7月29日 成体 1 塩崎哲哉

マメイタイセキグモ



写真：新海栄一

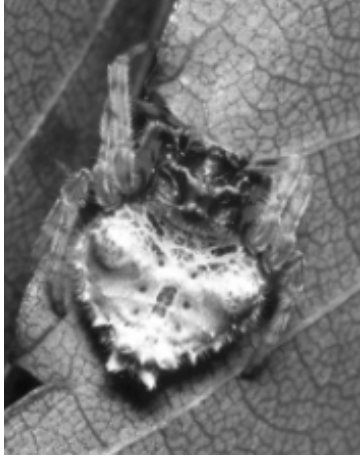
神奈川県城山町 1997年7月幼体 1 大川秀治

神奈川県城山町 1997年9月 成体 1 卵のう 3
大川秀治

神奈川県城山町 1997年9月 成体 1 卵のう 2
大川秀治

東京都八王子市八王子城跡 1997年9月20日卵
のう2 新海 明
神奈川県飯山観音 1997年10月13日 成体1
卵のう2 大川秀治

ムツトゲイセキグモ



写真：新海栄一

東京都あきる野市五日市広徳寺 1997年8月
成体1卵のう 宮下 直他
神奈川県城山町 1997年7月幼体1 大川秀治
京都府丹後半島(峰山町) 1997年8月24日
成体1 西川忠樹

スズミグモ

神奈川県城山町 1997年7月成体2 大川秀治

キジロオヒキグモ

神奈川県城山町 1997年9月幼体4 大川秀治
神奈川県飯山観音 1997年10月13日幼体1
大川秀治 (新海 明)



野村育世, 1997. 蜘蛛を愛づる日本文化史.

インセクタリアム, 34(9):12-17.

蜘蛛は神代の昔から嫌われものばかり思っていたのは評者ばかりではなからう。著者は蜘蛛に対する好悪はまさに日本文化と共に推移していきのだという。中国では古代より蜘蛛が人の衣につくと親しい客が来訪して吉事の前兆とされ、なんと春節の門口を飾る年画には蜘蛛をもつ鍾馗が描かれることもあったという。また、蜘蛛の糸に救われる話は古くからあり、中国の皇帝に幽閉された吉備真備(きびのみきび)は「野馬古詩」という今でいうパズルを解くように命じられ、長谷観音の化身の蜘蛛の引く糸をたどることにより読み解けて一命をとりとめたという。蜘蛛を吉兆とする中国起源の信仰は古代日本で独自の発展を遂げる。男の来訪を待つ女の恋占いとなったのだ。「わが背子が来べき宵なりささがねのくものおこ(し)ない今宵するしも」という歌をご存じの方も多いただろう。王朝時代には蜘蛛で恋占いする美しいイメージで詠まれた歌が数多くあった。ところが、鎌倉時代以降は事情が一変する。女が蜘蛛に託した恋の歌は減り、妖怪としての土蜘蛛の能舞台に極まる。江戸時代には蜘蛛の怪談話があふれ、近代になると西洋からのオカルトの妖怪という蜘蛛像に増幅されたという。このように、蜘蛛のイメージは歴史と共に変遷してきたのである。古代人は蜘蛛の網上の白露に花卉がかかった美しさを讃えた。実に偏見とは恐ろしいものである。それにしても、蜘蛛の文化史を探る「虫愛づる姫君」がいようとは...。不明を恥じる次第である。最後に、東京のクモゼミ(この日は鎌倉の七里が浜高校で行なわれた)で、この文献を紹介した当日に参加者一同で吉備真備にあやかり、混迷の世をたどる蜘蛛の糸にめぐり会うべく、鎌倉の長谷観音に詣でてきたことも付記しておこう。(新海 明)



ゼミ

ハエトリグモの論文再読(1)

池田博明

クモ目はいろんな科に分かれていて、それぞれが独自の特徴を持っている。なかでもハエトリグモ科は他の科のクモとは異なる特徴をいくつも持ち、研究例も多い。この連載ではハエトリグモに関する重要な論文を再読しながら、他のクモとの比較も加えて、クモに関する理解が深まるように記述してみたい。

ハエトリグモの眼

クモの眼は通常8個ある。そのうちハエトリグモでは前中眼(AME, anterior median eye)が最も大きい。



図1. ハエトリグモの顔面

(Bristowe, 1958 をもとに変写)

この前中眼は主眼とよばれることもあり、他の6個の眼(副眼)とは構造が異なっている。ハエトリグモの第一の特徴はこの大きな前中眼にあり、科の標徴でもある。ユウレイグモやマネキグモなどの6眼のクモはこの主眼を欠いているのが興味深い。

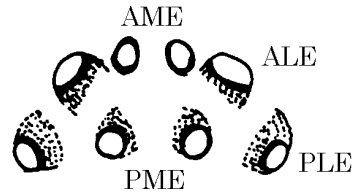


図2. アシダカグモの眼

クモの8個の眼は通常4個ずつの前列眼と後列眼とに分けられる。そしてその位置関係から前中眼(AME), 前側眼(ALE, anterior lateral eye), 後中眼(PME, posterior median eye), 後側眼(PLA, posterior lateral eye)と名づけられる。例えばアシダカグモの眼を上面からみただけ、それぞれは図2のようになる。

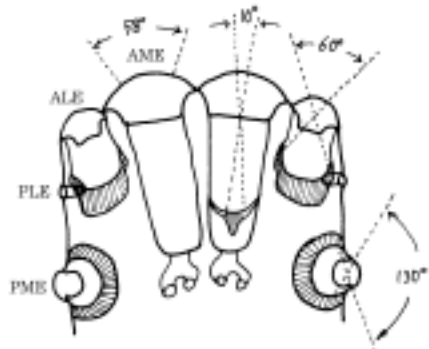


図3. ハエトリグモの眼

(Foelix, 1982 をもとに変写)

では、ハエトリグモの眼はどのように呼ばれているのだろうか。図3はフェーリクス『クモの生物学』(初版)の図である。これを見て

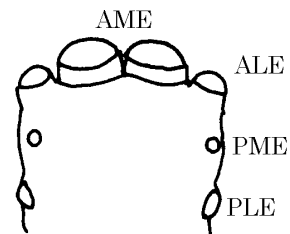


図4. 通常の命名

「おや?」と思われた方も多いのではないだろうか。

PME(後中眼)とPLE(後側眼)が通常の呼び方(図4)とは逆になっているのだ。この本は間違っているのだろうか。いや、実はこの方が正しいのである。

発生学的にはハエトリグモの背甲のいちばん後ろにある眼は通常のカモの後中眼なのである。これはドイツ・ゲッチンゲン大学のハインリッヒ・ホマンが一連の「クモの側眼の発生」(1953-1961)の研究の中で明らかにしたことのひとつである。ハエトリグモが取上げられているのは1956年の論文で、研究された種は *Evarcha falcata* Clerck 註1)である。図5

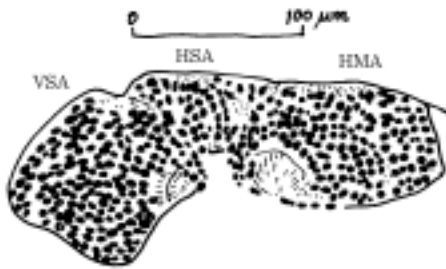


図5. ハエトリグモの眼の発生初期の網膜

(Homann, 1956 をもとに変写)

が側眼の部分の発生初期の組織である。この図ではVSAがクモの前側眼、HSAが後側眼、HMAが後中眼である。HSAが他の側眼より小さいことがよく分かる。もう少し発生が進んだ時期

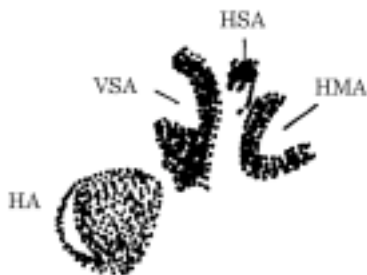


図6. ハエトリグモの眼の発生後期の網膜色素

(Homann, 1956 をもとに変写)

の網膜の色素の様子が図6である。HAは主眼(前中眼)である。アシダカグモの側眼の位置と対照すると、ハエトリグモではHSA(後側眼)が最も小さくなったことがよく分かる。

しかし、ハエトリグモの側眼に関してフェーリクスのように発生学上の相同を考慮して呼ぶ研究者は決して多くない。ほとんどの生理学者、分類学者、形態学者はハエトリグモの最小眼をPLE(後側眼)と呼ばずにPME(後中眼)と呼んでいる(註2)。これはPMEという名称が発生や機能に関するものではなく、位置関係を表す名称だからである。フェーリクス自身も『クモの生物学』第2版では慣例に従っていた。初版の呼び方では同じ本の中で生理学者の研究を引用したときにPMEが異なる目を表してしまうからである。

ところで、コモリグモやメダマグモには主眼以上に大きな副眼がある。これらは位置的にも発生的にもPME(後中眼)である。

参考文献

Homann, H., 1956. Die Entwicklung der Nebenaugen bei den Araneen III. *Biol Zool.*, 75: 416-421.

註1) 日本のホオジロハエトリは本種に同定されてきたが、日本も含めて極東地域の種はヨーロッパ産とは別種であるという研究結果がロシアのマルシクによって発表される予定である。日本のホオジロハエトリの学名がどうなっているのかは現時点では不明である。

註2) 「Neurobiology of Arachnids」に寄稿しているハエトリグモの眼の研究者、ランドやフォースター、山下茂樹は最小眼をPMEと呼んでいる。また分類学のマディソンやワンレスも同様の使い方をして

謝辞

Homann の文献は吉倉眞博士にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

クモにおける分子系統の 種分化研究への応用

千田高史

これまでにクモにおける、分子系統を利用した研究は、ハワイにおけるアシナガグモの分化を、ハワイ群島の成立に重ね合わせた、生物地理学的な研究や(Croom, H. B., R. G. Gillespie, & S. R. Palumbi, 1991; Gillespie, R.G., H. B. Croom, & S. R. Palumbi, 1994), シボグモ科の単系統性の検証へのアプローチに利用した研究があった(Huber, K. C., T. S. Haider, M. W. Mueller, B. A. Huber, R. J. Schweyen & F. G. Barth, 1993)。最近、分子データをもう一步踏み込んで利用した研究が発表された。相当な時間と労力を費やしたであろう大著である。

洞窟性の生物は、地理的隔離が起きやすく維持されやすいと考えられるので、地理的隔離に基づくと推定される種分化の研究には好適である。これまでも、洞窟性のコオロギなどで、アロザイム多型や DNA ハイブリダイゼーションによる遺伝学的研究がある。*Nesticus* (ホラヒメグモ類)もまた、洞窟性のクモである。この種の研究では DNA レベルでの情報が大量に得られることにより、個体群と種の歴史的研究が容易になる。

Hedin (1997) は、アパラチア産洞窟性クモ (*Nesticus*) の単系統種群の個体群の遺伝的構成と種分化のメカニズムの關係に焦点を当てた研究をまとめている。この研究では 25 の *Nesticus* 個体群から約 10 頭ずつ、合計 256 個体から得たミトコンドリアゲノムの ND1 遺伝

子の部分配列 387bp の塩基配列を使って、近縁な姉妹種の三つのペア

N. tennesseensis--*N. dilutus*,

N. holsingeri---*N. sp.*¹,

N. paynei---*N. carolinensis*/*N. mimus*。

について、個体群間の遺伝的変異のパターンを解析した。

N. tennesseensis と *N. novspla* は、洞窟と洞窟の外にも見られる種、*N. dilutus* と *N. holsingeri* は洞窟の深い部分を好む種、*N. paynei* と *N. carolinensis* は洞窟の入り口近くを好む種、*N. mimus* は洞窟外の石の隙間に見られる種であるという。移動は洞窟深くを好む種ほど少ないと考えられる。これらの *Nesticus* の単系統性や、それぞれのペアが姉妹種であることは、以前の研究 (Hedin の博士論文) で分子系統学的に確認されている。

得られたシークエンスデータは、DNA の多型の程度や、その多型が中立突然変異モデルに一致するかどうかの検証や、遺伝子流動のレベルの評価、相対速度テスト、など多岐にわたる解析を経て議論され、考察は個体群の遺伝的構造 (それぞれの個体群では、ND1 遺伝子にハプロタイプが存在する 경우가多かった) から、個体群やこの地域において過去に起こったであろう、分断や断片化にまでおよぶ。各個体群に存在したハプロタイプ、個体群、種はいずれも明瞭に単系統性を示しており、このような場合に、形態情報に比較して分子情報が非常に有効であるといえる。また生息環境の選好性と、各個体群内の多型の程度には差は見られなかった。

Hedin (1997) では、分子系統は系統解析そのものが主眼ではなく、種というカテゴリーよりもさらに下位のレベルである個体群間の、現在の遺伝的構造や地理的分布、生態学的特徴などから、個体群の歴史、種分化のプロセスの推

定のための道具の一つとして位置付けている。しかしながら DNA シークエンスを用いることにより、先行する他の分類群の研究での、アロザイム解析などに残る曖昧さを軽減できることは、DNA シークエンスのデータの明解さや情報量の多さに負うところが大きい。

引用文献

- Croom, H. B., R. G. Gillespie, & S. R. Palumbi, 1991. Mitochondrial DNA sequences coding for a portion of the RNA of the small ribosomal subunits of *Tetragnatha mandibulata* and *Tetragnatha hawaiiensis* (Araneae, Tetragnathidae). *J. Arachnol.* **19**(3): 210-214.
- Gillespie, R. G. H. B. Croom, & S. R. Palumbo, 1994. Multiple origins of a spider radiation in Hawaii. *Proc. nat. Acad. Sci. U. S. A.* **91**(6): 2290-2294.
- Huber, K. C., T. S. Haider, M. W. Mueller, B. A. Huber, R. J. Schweyen, & F. G. Barth, 1993. DNA sequence data indicates the polyphyly of the family Ctenidae (Araneae). *J. Arachnol.* **21**(3): 194-201.
- Hedin, M. C., 1997. Molecular phylogenetics at the population/species interface in cave spiders of the southern appalachians (Araneae: Nesticidae: Nesticus). *Mol. Biol. Evol.* **14**(3): 309-324.



インフォメーション

自然史学会連合会総会（10月25日）にて関連学会への連絡

文部省科学研究費時限付分科細目「自然史科学」この分科細目に多くの申請が出されること

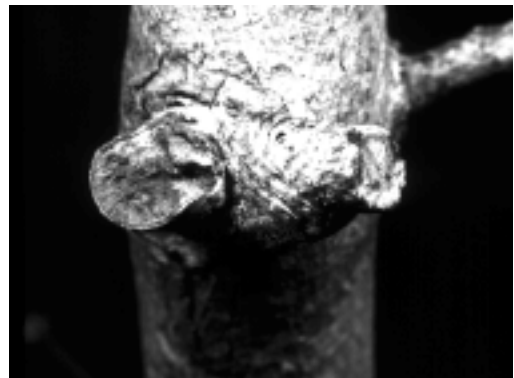
を希望しています。この部門への申請件数が少ないと部門自体が打ち切りになってしまう可能性があります。申請の〆切が12月初旬です。自然史学の興隆のためにも宜しくお願いします。

その他の内容は *Acta arachnologica* に掲載されます。

（自然史学会連合への代表者（小野展嗣）・代理 / 池田博明より）



ギャラリー



ツツゲホウグモ

Polys columnaris Thorell, 1890

画面左は木の枝が折れたあと、右がツツゲホウグモの腹部。いかがでしょうかこのみごとな擬態。（谷川明男）



求む

交尾済みのオニグモの雄の標本

オニグモの仲間の雄では、移精針の先にエンボルスキャップというものがついていて、交尾後にはこれが外れて雌の外雌器に残される場合が多いです。オニグモ（普通のオニグモ）ではどうもこのエンボルスキャップはないようなのですが確証が得られません。これを確認する

ために、交尾前の雄と交尾後の雄の触肢を比較したいのです。確実に交尾前の雄の標本は手に入ったのですが、確実に交尾後の雄の標本がいまだに手に入りません。どなたかお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひ拝見させて下さい。あるいはオニグモの交尾を観察する機会がありましたら、ぜひ交尾終了後の雄を採集して下さい。

2480025 鎌倉市七里ガ浜東 2-3-1
県立七里ガ浜高等学校 谷川明男



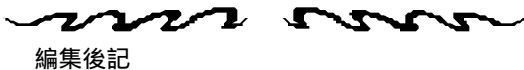
原稿募集中

「遊絲」の原稿を募集中です。ちょっとした観察記事(短報)、会員に広く知ってもらいたい情報(総説)、採集記録、文献紹介、各地の同好会の催物情報、研究上の標本や資料募集の記事等等、なんでも構いません。こんなコーナーも作って欲しいという希望があれば、それもOKです。会員の皆さんのご協力を是非お願いします。

投稿にあたってのお願い1. 原稿はクモ形類・多足類に関する事ならなんでも構いません。2. 字数制限はありませんが、あまりに長文の場合は削除や分割での掲載をお願いすることもあります。3. 原稿はワープロが望ましいですが、手書き原稿、はがきなどでも構いません。

原稿送付先: 1900022 立川市錦町 3-12-16-1103
新海 明まで

発行は、年2回(5月, 11月)の予定。締切は発行月の前月末日です。



編集後記

日本蜘蛛学会のニューズレターの発行が8月

の大会で決定したが、ここに第1号をお届けすることができてほっとしている。大会終了後の四日市市立博物館のロビーの片隅で、このニューズレターのタイトルを検討した。加わってくれた方々は気儘に色々な候補作をあげて下さった。編集を担当する新海、池田、谷川ともに名前に「明」が入っているから「明³」がいいとか、編者の沖縄での行きつけの店「おかめ」にしよう等等である。さすがに、これらの提案は却下されたが、このなかで「ゴッサマーはどうだろうか」という案がでた。けれども、この名前はかつてAtypusで使われていたことがあった。それならばその和訳遊絲ならどうかという意見がでてきた。この瞬間、一同納得してしまったように思う。「遊」が「絲(糸ではなく)」。なぜかみんなひどく気に入ってしまった。ロビーを会場として小澤實樹さんのデザイン展が開催されていたが、たまたま同氏が片付けに来られた。さっそく、その話をすると「遊絲」は小澤さんの雅号でもあるとのこと、表紙のタイトルを描いてもらえないか打診すると快諾して下さった。氏も「何か因縁を感じる」とのことだった。かくして、お届けしたこの第1ページを飾る「遊絲」が誕生したわけである。編者はこの企画を出すにあたり、学会の苦しい財政事情から最悪の場合には自腹を切ってもとを考えていた。しかし、杞憂に終わった。総会後ににわか作りの寄付金袋を回したところ、なんと75000円余りのご厚情を賜った。中には1万円札さえ混じっていた。この「熱い」ご支援に対して責任を痛感するとともに、第1号を読んでいただいた会員の皆さんの期待にどこまで添えたか甚だ不安が残る。けれども、批判があって初めて進歩もあると思ってもいる。多くのご意見とご投稿をお待ちする次第である。

(新海 明)

遊絲 第1号

1997年11月25日発行

編集者 新海 明，谷川明男，池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 西川喜朗